唐古・鍵考古学ミュージアム
KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション 22

弥生美を表現した水差形土器

●コレクション・データ

時　　代：弥生時代　中期
調　　査：唐古・鍵遺跡　第61次調査
発 見 年：1997年
大 き さ：高さ13.4㎝・胴部径14.0㎝
展示位置：エントランス「小窓ケース１」

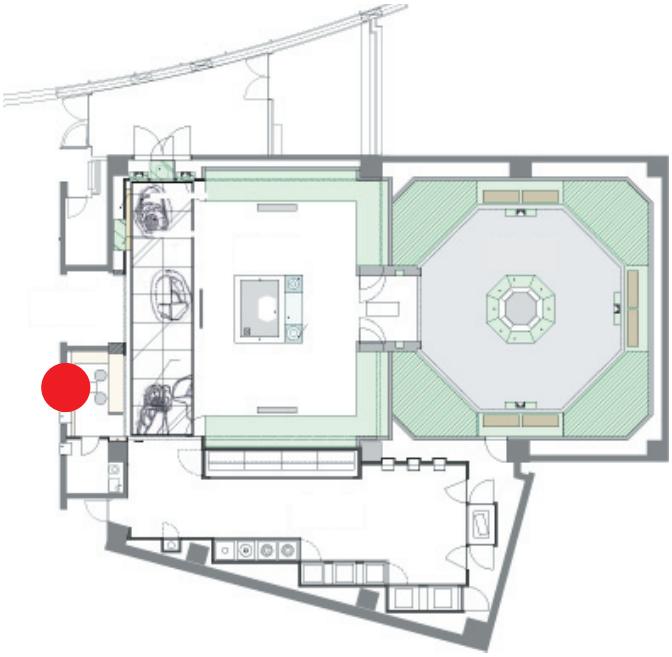
教科書や歴史一般書などでは、原始時代の土器として、縄目の残る文様や炎を立体的に表現したような縄文土器、櫛描文様を施した弥生土器がよく紹介されています。黒褐色を呈したダイナミックな造形美をもつ狩猟民の縄文土器に対し、赤褐色を呈した素朴感のある農民の弥生土器は対照的です。

さて、今回は弥生土器のなかでも秀麗な一品として、特筆できる土器を紹介します。この土器は「水差形土器」と呼ばれる土器で、唐古・鍵遺跡の弥生時代中期の井戸から完全な形で出土しました。井戸からの出土品は完全な形のものが多いことから、井戸（水）の神様にお供えしたものだと考えられています。

紹介の水差形土器は、算盤玉のような胴部に直立する口縁部がついた壷の一種で、口縁部と胴部との界には把手が付けられています。把手に中指と薬指を入れ、口縁部を親指で押さえると、水をすくったり注いだりするのに適していることが分かります。また、把手と反対側になる胴部下半には水をすくう時に擦れ磨耗した跡もみられ、まさに「水差し」としての機能をもっている土器と言えます。

この土器は、形態的な特徴だけでなく、胴部に描かれた櫛（笹状の茎を十本程度束ねた工具）描きの簾状文や流水文もみごとな描き方をしています。頸胴部界には簾状文を廻らし、その下に「工」字状を呈した流水文を三つ割付しています。また、流水文の余白部分には、「口」字状の長方形の櫛描文を充填することにより、流水文が土器全体に巡っているように見せかけており、作者の心憎い配慮がうかがえます。

弥生時代の人が、水の流れを意識してこの文様を描いたとは考えられませんが、櫛状の工具を丁寧に回転させながら、土器に刻む行為には、唐古・鍵人の「弥生の精神」を感じさせる一品と言えるでしょう。

唐古・鍵考古学ミュージアム
【☎34・7100】
開館時間　午前9時～午後5時（月曜は休館）
観覧料（カッコ内は20人以上の団体料金／15歳以下は無料）
▼大人　200円（150円）
▼高校生・大学生　100円（50円）

ミュージアム上面図と展示位置